日本体育学会
体育哲学専門領域
会報
Vol.17(2), August, 2013

記事

♪ 巻頭言
♪ 体育哲学考
♪ 書籍紹介
♪ 私の研究
♪ 箱根合宿に参加して
♪ 運営委員会からのお知らせ
♪ 広報からのお知らせ
♪ 訃報
♪ 次号予告

巻　頭　言

「武道の本質について」

志々田　文明（早稲田大学）

1978（昭和 53 年）年 7 月，新宿駅．私は恩師富木謙治先生に連れられてロマンスカーに乗り込んだ．箱根の強羅で開催される体育原理専門分科会の夏季合宿研究会に参加するためであった．当時私は，早稲田大学文学部哲学科を卒業後，4 年間高等学校で教鞭を執っていたが，方針を転換し，体育学を学ぶために筑波大学大学院体育研究科修士課程に進学していた．この頃，この合宿には前川峯雄，川村英男，永井康宏，浅田隆夫各先生ほか体育原理の大御所が参加されており，前体育哲学専門領域会長の大橋道雄先生，服部豊示先生ほか私と同世代の方々は大学院生として参加していた．それから断続的ではあるが長い間この研究会に参加し，様々な研究発表を聞くなかで成長させていただいた．富木先生はこの時がんに冒されていた．先生は合宿後に入院し，私は医師からの余命一年の宣告をご家族ともに知らされていた．ロマンスカーでの車中，先生は「合気道競技について」という小冊子を取りだし，15 分で読めるから読んで感想を述べるように求められた．弟子からも学ぶことを自然とする姿勢があった．翌年先生は不肖の弟子を残して逝かれた．爾来 34 年，富木武道論を縦糸にして様々な研究を行ってきた．富木武道論を縦糸にしてきた理由は私の恩師であったからではない．武道家としての強さや巧さでもない．その理論が独創的であったからである．その独創性がまったく輝きを失っていないにもかかわらず，それが学会や社会によく理解されていないことが，今なお私が研究を終えない理由である．

その独創性とは，第一に，比較武道論を展開した上で繰り広げられる本質論的武道論にある．「非道を行ずべからず」（世阿弥）といわれるように，芸道・武道の世界では一つの道への専念集中が求められる雰囲気が色濃い．この「空気」を破ったのは嘉納治五郎師範であった．嘉納は剣術，棒術，合気柔術，ボクシング，レスリングなどあらゆる格闘技に関心を示して自ら，あるいは弟子を介して研究を行った．しかしその思想は巨大化した戦前の柔道界には定着しなかった．富木の「柔道の将来と合気武道」という題名の連載論文が昭和 13 年に雑誌『柔道』に掲載されると，読者の圧力に屈した編集者は，二回目の掲載時から肝心の「柔道の将来」という主題を題名から取り去ってしまったのだ．柔道の名選手であった富木は学生時代から合気柔術（今の合気道）も修行したのであるが，そのことが人々に知られるようになると，富木の理論の内容を見る前に，人々は「彼は合気道の人」というラベルを貼り，その研究を見向きもしなくなったのである．富木は嘉納にならって，

合気柔術の修行以後，剣術，空手，中国武術，起倒流柔術，天神真楊流，嘉納の考案になる講道館の各種形を研究し，まさに超武術的，超流派的に研究を進めた．そしてそれを教育的に編成し，柔術から発展すべき二つの種目（①当て身なしで選り袖に組んで競う柔術競技，②当て身を入れて離れて競う柔術競技）の必要性を論じた．

富木は，諸武道や各種柔術との技の比較研究から帰納した要素を整理し，新たな発展として新しい柔術文化を生み出そうとしたのであり，この点に富木の独創性の第二がある．小谷澄之十段や大滝忠夫九段などそれに注目する柔道研究者はいたが，当時の柔道界は富木の生前にそれを受けとめるには至らなかった．何故か．主な理由の一つは，富木のように多様な稽古体験，研究体験なしには，彼の研究の理解と評価が難しかったという点にある．実践と研究の併行には，時間と才能と努力が不可欠なため，同質の体験を持ち得ない以上，理解は困難を極めるからだ．

ではこの独創性の論客は，武道の本質をどのように考えたのだろうか．富木はそれを実用性とみた．次のエピソードがある．役者に振り付けをする専門家に殺陣師がいる．上手に斬らせ，斬られるように演技を指導し，観衆に感動を与える練達の方たちである．富木は語る．しかしその形は武道の「形」ではない．殺陣師の見事な形は観客を意識した，いわば見せるための形であるのに対し，武道の形は実用性から離れない護身性のある形だからだ．富木はこの考え方を，棒高跳びに背面跳びが登場した際に交わした早稲田大学の同窓・織田幹雄（金メダリスト）との会話で確信したという．バーを怪我しないかたちで超えなければ意味がないのではないかと語る富木に，織田は背面跳びの方が，記録が伸びるのだよ，と述べたのである．

武道の競技スポーツ化は実用性からの乖離として現前している．富木は実用性を維持することによって武道性を維持し，教育性を重視することによって安全性を確保しようとした．つまり「本質」を実用性に見たのである．しかし本質論は彼の理論である．多くの同調者がいたとしても「普遍」的理論とはなり得ないのだ．武道の「本質」という問いは，結局，武道文化（価値）の普及のための理論として定立されざるを得ない．研究者は，武道の「本質」という問いに対して，その解答が相対的な言明に終わる宿命をもたざるをえない，ということの自覚が必要と筆者は考える．私はそうした知恵を社会学から学んだのであるが，その基礎付けは哲学にあるのではないか．

志々田 文明（fuzanaoi@waseda.jp）

体育哲学考

「努力礼賛」

阿部 悟郎（仙台大学）

ふしぎだと思うこと．これが科学の芽です．
よく観察してたしかめ，そして考えること．これが科学の茎です．
そうして，さいごに謎が解ける．これが科学の花です．

これは，かの高名な朝永振一郎博士のお言葉である．もちろん，ご存知の方も多いだろう．わたしのお気に入りの言葉であり，研究室の机の前壁面にはその自筆色紙（もちろん複写）を貼り付けてある．この一枚の紙片は，あの震災にも全く破損することなく，ありがたくも無傷で堪えてくれた．そして，このお言葉は，わたしの講義では，必ず一度は登場する．このお言葉を学生に向かって発する時は，実に愉しい．そして，学生も，ここ（だけ）は興味深く聴いてくれる（ような気がする）．

さて，朝永博士は，1965 年に，ノーベル物理学者を受賞．偉業である．もっとも，同世代には，あの湯川秀樹博士がおられる．湯川博士は，朝永博士より一年ご年少ながら，飛び級により（らしい）大学はご同期，さらには戦後間もない 1949 年にノーベル物理学賞を受賞．これは日本人初の快挙であった．朝永博士と湯川博士，ともによき仲間であり，またよきライヴァルでもあっただろう．

もっとも，このお二方の巨人は，それぞれその学風が全く相異するようである．湯川博士は「常に新しいことに挑戦することを恐れない」ような学風であったらしい．開拓的でなにやら天才的な才覚すらイメージされる．これに対して，朝永博士は「新奇をてらう前に従前手法でとことん追求する」ような学風であったという（長島順清「素粒子の物理－先駆と展開の鳥瞰－」）．地道で堅実な，いわば地味なイメージであろうか．

つい地味という表現を用いてしまったが，決して悪い意味ではない．むしろ，私はそこに惹かれてしまう．そもそも学究とは，そのようなものではないのか．朝永博士は，日進月歩の科学的日常にあっても，「従前手法でとことん追求した」結果，人類史上の科学的発見に到達したのである．地味という表現は，開拓や発見の華やかなイメージに比して，「とことん」追求する丁寧で継続的な努力姿勢を対照的に表現する．派手ではない，むしろ地道で着実な学究の道．

そして，あのお言葉は物理学に留まらない，学問研究全般に全く合致するだろう．もちろん，体育哲学にも妥当する．それは何であるのか．それはなぜなのか．問いは生起し，自らの漠とした常識的観念を根底から揺さぶる．これはまぎれもなく芽であるだろう．ただし，われわれは，おおよその場合，観察という方法はとらない．しかし，問題設定にかかわる関連文献をとにかく渉猟し，それらを「とことん」読み深め，そして徹底的に思考するだろう．よく精読してたしかめ，そして考えること．これが茎であるのか．「そうして」，さいごに自分なりの解へと到達するだろう．これが花であるのか．

冒頭に掲げた朝永博士のお言葉は，あの学風ならではの特有の滋味がある．もっとも，私のお気に入りは，芽や花ではなく，むしろ茎の部分である．この茎をいかに健全に，いかに強く，そして太く育てるか．その茎が良ければ，おそらくよい花が咲くだろう．われわれも，やがて咲く花のために，自らの問いにこだわり，丁寧な文献精読と思考の努力をとことん積み重ねる．地道で堅実で，やはり地味であるかもしれない．

しかし，一瞬の知的な閃きやインスピレーション的な氷解も，これなしにはあり得ないかもしれない．アルキメデスが入浴時に浴槽からあふれる湯流をみてユーレカ Eureka！と叫び，ニュートンが木から落下するリンゴを見てハッ！としたように（このお話の真偽は不明）．アルキメデスもニュートンも，観察と思考をとことん重ね，ある臨界点へ達していたのであろう．やはり「よく観察してたしかめ，そして考えること」が不可欠なのである．人知を遥かに超えた測り知れない努力の積み重ね．そこに，神の一押しがあったのであろうか．いな．そこにしか，神は微笑まない．ボルノウであれば，それをも邂逅 Begegnung と呼ぶだろう．ブリリアントな知的瞬間との邂逅．

もっとも，この邂逅は計画され，予定され得るものではない．そして，それは全く偶発的な出来事ではない．ボルノウがいうには，実は，邂逅は，ある準備状況が一定の段階に達したときにようやく訪れる．つまり，それは「長い間厳しい努力がつづけられ，それによってその人のうちに出会いを受けいれるだけの準備がととのってから，はじめて生ずるもの（Bollnow, O.F. (1959) Existenzphilosophie und Pädagogik, S.117.）」である．だからこそ，この邂逅に対して，人がせいぜい前もってなし得ることは，ほかでもない厳しい努力の継続的な積み重ねであるという．この「厳しい」はご愛嬌として，やはり努力は何においても必要であるだろう．スポーツにおいて，まさにそうであるように．

われわれは，結局，ユーレカ！と叫ぶところまでいかないかもしれないが，それでも自

らの問いを「とことん」追求し，「とことん」読み深め，そして「よく考える」地道で堅実な努力はできる．できることを「とことん」行うこと．でき得る正しい手法で「とことん」追求すること．われわれにとっても，この「とことん」の努力こそが重要であるだろう．

体育哲学も，それにつきるのではないのか．

阿部 悟郎（g-abe@sendai-u.ac.jp）

書籍紹介

松原隆一郎（2013）『武道は教育でありうるか』イースト新書．

工藤 龍太（早稲田大学スポーツ科学研究センター招聘研究員）

著者は東京大学で社会経済学・相関社会学を専攻とする社会学・経済学者である．また彼は講道館柔道三段，空手から派生した総合格闘技である国際空道連盟常任理事，大道塾総本部ビジネスマンクラス師範（五段）という経歴も持つ，武道の実践者・指導者でもある．

本書の目的は，武道の意義を教育的価値の視点から考察することである．武道というと，一般的には柔道や剣道など各種種目の総称と理解されている．本書で用いられる「武道」という概念だが，「身体の使い方について伝統的な所作を学び，自然への理解を深め，競技を通じて他人を知り，みずからを律する．そのように身体を使いながら自分や他人，社会を知る文化伝統」と定義されている．そして，それは身体を用いるものの，「言葉遣いにも細心の工夫を凝らすような知的な制度」（13 頁）とある．これらの定義は著者の武道実践も大きく影響を与えていると考えられる．

本書の構成は「柔道の危機」，「武道の効用」，「総合武道と教育」の 3 部 10 章からなる．本稿では，敢えて武道が教育でありうるのかという著者の立てた問いにではなく，著者の武道論（それが最も端的に示されている第一部）を中心に，その内容を紹介していきたい．なぜなら，著者の説く武道概念とその研究方法を把握しなければ，それが教育でありうるかという次の問いにも辿り着けないであろうからだ．

著者は武道を教育という視点から論じるに際し，上述した武道の定義を用いるのではなく，最も普及している柔道の現状の分析から始めている．そして，その柔道が現在危機に瀕していると指摘する（柔道界が直面している危機は，広く武道全般の未来を示唆していると著者はあとがきで述べている）．第一章「『四つの危機』とは何か」で語られる，「競技力の危機」，「女子柔道の危機」，「JUDO 化の危機」，「安全性の危機」の四点である．柔道の抱える様々な問題がマスコミに取り上げられるようになった昨今，これらは武道に関心があれば決して聞き慣れないものではないが，3 点目の JUDO 化の危機に著者の武道研究のスタンスが示されている．

パワー柔道，ポイント柔道等としばしば批判されるスポーツ化が徹底した柔道が「JUDO」と表記されるのは，我々も五輪の時期などにはよく目にすることである．だが，そうした JUDO に対し，襟と袖をしっかり持って一本を取りに行く「正しい柔道」は講道館柔道の伝統に存在したかと著者は疑義を呈している（嘉納はそうした「正しい柔道」はそもそも初心者のためのものだと述べている）．嘉納による講道館柔道の創始を「明治時代における一種の『総合格闘技』の誕生」とし，JUDO の誕生を「グローバリゼーションのもとでの『第二の総合格闘技化』」（74 頁）と著者は解釈している．著者は嘉納の柔道論をたどることで，嘉納が本来目指した柔道は総合格闘技的な護身術であったと指摘する（最近の武道史の研究領域でも，こうした指摘はなされている）．嘉納が柔道に学術的な研究も取り入れるべき

と主張していたことを，現存する知識の最大限の善用，つまり嘉納が掲げた柔道のスローガンの一つである，「精力善用」の一環とする．そこから，現在世界的に普及している JUDO も，柔道の自然な展開に過ぎないというのである．また，嘉納が批判した高専柔道や現在も続く七大柔道戦なども，嘉納の理念の一つである「工夫や観察」の楽しさを実現しているものと評価している．これらから明らかなように，著者は嘉納の柔道思想を再検討することで，現代の柔道が抱える問題点を考察するという立場をとっている．

以上簡単にみてきたように，本書はあくまで柔道における教育的意義の考察が中心になっている．しかし，昨今マスコミを騒がせてしまった柔道を考察対象にするにあたり，柔道の創始者である嘉納治五郎の思想をたどりつつ現在の問題を改めて見直すという姿勢は，我々が武道研究するうえでも一つのモデルを示している．また，一口に柔道といっても，嘉納の柔道論，競技柔道も五輪柔道から高専柔道，七大戦といった学生競技柔道など多岐にわたっている．何より，著者の「武道は教育でありうる」という姿勢が本書を一貫している（何故教育でありうるというのかは，本書を手に取って確認していただきたい）．武道が現在社会で置かれている状況や，武道が抱える問題を概観する入門書として本書を推薦したい．

工藤 龍太（ryutak77@gmail.com）

私の研究　「スポーツにおける暴力についての応用倫理学的研究」

大峰 光博（早稲田大学大学院）

スポーツにおいて倫理的ジレンマを生む暴力的現象について，問題構造を明らかにし，解決に向けた提案を行っていくことが私の研究課題です．特に，野球に関連して生じる暴力的現象に着目して，研究をすすめています．この課題に対しては，2 年ほど前から取り組み始めましたが，昨今のスポーツの暴力問題へのメディアでの取り上げられ方や，世間の関心を目の当たりにし，非常に驚かされるものがあります．メディアでは，練習場面における体罰やセクシャルハラスメントなどが問題視される傾向にありますが，私は試合場面において顕在化する暴力的現象を中心に，研究をすすめています．以下では，具体的な研究対象と，方法について述べさせていただきます．

スポーツの試合における暴力的行為は，法的な責任に問われるケースが少なく，また，多くのプレイヤーが暴力的行為を試合の一部として容認するケースも存在します．1 つの事例として，野球における報復死球があります．

周知のように，野球は社会的影響の大きいスポーツの 1 つであり，過日開催された WBC においては，日本対オランダ戦で，関東地区の平均視聴率が 34.4%，瞬間最高資料率が 44.6% を記録しました．報復死球は，メジャーリーグにおいて頻繁に試みられる行為でありますが，WBC の 1 次ラウンド D 組のカナダ対メキシコ戦においても，報復死球が行われました．9 回に 6 点のリードを保ったカナダがバントを行ったことに対し，メキシコが報復死球を行いました．結果的に乱闘にまで発展し，両チームで計 7 人の退場者が出ました．日本のプロ野球においても，報復死球が試みられるケースがあります．

報復死球は，公認野球規則によって明確に禁止されている行為であり，違反したピッチャーは退場，もしくは，警告を受けることになります．つまり，報復死球は意図的ルール違反の 1 つのケースであると言えます．しかしながら，報復死球は野球における不文律（unwritten rule）を破ったチームやプレイヤーに対して課される制裁として，特にメジ

ャーリーグにおいては，プレイヤーや監督だけでなく，ファンによっても受け入れられる現状があります．

方法としては，現実に生じている倫理的問題にアプローチする，応用倫理学の観点から検討を行っております．特に，具体的な分析視点として，責任概念に着目し，研究をすすめております．応用倫理学の領域においては，責任概念を用いることによって，様々な倫理的問題にアプローチされています．

例えば，ハンス・ヨナスは，責任概念の重要性を指摘し，現在世代の未来世代に対する責任について提唱しました．ヨナスの提起は，現実の環境問題に対する取り組みに対しても，大きな影響を与えています．また，ビジネス倫理の領域においては，企業の社会的責任（CSR）の意味内容についての議論がなされることによって，現実の企業の取り組みに，有益な視座を提供しています．しかしながら，野球における報復死球の問題だけでなく，スポーツの倫理的問題に対して，責任という観点から論じられた研究は僅少であります．責任概念に着目して，報復死球の問題だけでなく，スポーツにおける暴力問題にアプローチすることによって，現実に倫理的ジレンマを抱えるプレイヤー，コーチ，ファンなどに対して，解決に向けた糸口を提案出来るよう，研究に励みたいと考えております．

大峰 光博（20431604@toki.waseda.jp）

箱根合宿研究会に参加して

「ずれ」　　**後藤 太郎（東海大学大学院）**

海の日を挟んだ 7 月 13，14，15 日，例年通り体育哲学専門領域夏期合宿研究会が体育哲学の聖地，箱根で行われました．研究会は 2 泊 3 日のスケジュールで進み，この 3 日間，議論は発表会場ではもちろんのこと，お食事会場，お風呂場など様々なところで昼夜を問わず白熱しました．ここにいらっしゃる先生方は箱根でこのようにして切磋琢磨しながら共に歩み，歴史を積み重ねて今に至っており，だからこそ先生方のなにげない言葉にも底が見えない深さを感じてしまうのであります．この研究会は今年の私にとって最大の山場でした．期待と不安，そして冒険がこの研究会にはあります．この箱根とのかかわりで自分をどう変えるか．それが課題であり，楽しみとなりました．

私は以前平凡なプロサッカー選手をやっていました．私のような人間がこの世界を冒険することはおそらく稀でしょう．そして 42 歳なのに以前勤めていた大学を辞め，大学院生になりました．なんてことをしてしまったのでしょうか．うっかり一冊の本を読んでしまい，どうしても勉強せずにはいられなくなったのです．たかが一冊，されど一冊．これで本が人生を動かしてしまうとは本当の話ということになります．こんな私ですからもちろん場違いでいろんなことがみなさんとずれているのは重々承知しております．やはりこのずれはマイナスでしょう．しかし私はもしかすれば何か新たな可能性が生まれるかもしれないという勘だけで選択しました．頭で考えたらバカのことですが何故かこの選択が心地いいのであります．そして今は哲学がとにかく楽しい．心からそう思えます．

話を元に戻します．この研究会は期待と不安，ドキドキとワクワクと言う言葉がぴったりです．発表は確かに大変緊張します．しかしチャレンジして自分を試す，そして何かに気付いた時，大きな喜びを感じます．この研究会は駄目で当たり前，ボロボロに言われて一人前という感覚はなんとも不思議な感じがします．自分の考えを正しく表現できないもどかしさ，相手の話を正確に聞き取ることができない自分の実力，すべてがずれています．

しかしこれを少しずつ解消することができれば自分を成長することができるのではないかと考えるのであります．相手の立場に立って物事を深く考えることができるか，これが私のこれからの課題になるでしょう．どうしても自分本位に物事を考えてしまい，思考が固定されてしまうのであります．これを何とかしたいと思っております．

最後になりましたが，みなさんに是非聞きたいことがあります．それはこの研究会を何かに例えるとしたら一体何でしょうか．先生方がどんな答えを導き出すかとても興味深いです．この問いからこの研究会の「見方」に迫ってみたいと希望もちながら終わりにしたいと思います．このような素晴らしい会に参加させていただいたこと，この場をお借りして，改めて御礼申し上げます．

後藤 太郎（gotou.tarou@purple.plala.or.jp）

「箱根合宿の醍醐味」　　浦谷 郁子（日本体育大学大学院）

夏の最初の連休を箱根で楽しもう！と多くの人が箱根登山線に乗り込む中，私は初めての哲学専門領域の箱根夏合宿へ．そこでは，参加者が研究に費やした時間はそれぞれ違えども，発表する姿に刺激を受けた．同時に私は発表７分，質疑応答３分を控えていたためその完成度に戸惑いを感じた．なぜなら私自身，半信半疑の研究段階を発表しようとしていたからである．

発表は用意した資料を読み上げるのに精一杯で，特に質疑応答はどうだったのかわからないまま進み，あっという間に 10 分が過ぎた．そんな状態の私にも関わらず，意見や課題を丁寧に教えてくださるフロワーの対応に素敵な場を設けていただけたと幸せを感じた．発表するまでは不安だった気持ちも，達成感とまではいかないがあの場に立てて良かったと思えた．それは私に限ることではないだろう．そしてこうした光景は発表が終わってからの時間も見受けられた．例えば食事をしながら，歌を歌いながら，時には踊りながらとさまざまな場面において真面目さとユーモアの絶妙なバランスを兼ね備えた先生や参加者たちと尽きることなく議論を繰り広げることができた．これこそ箱根合宿の醍醐味だと実感した．その中でも印象強く残っていることばは，「結論を出すことだけにとらわれず，そこからでた問いを問い続けることの大切さ」である．いわば，論が尽きないことによって論ずることの楽しさを感じられるといったところであろう．

合宿と聞くと辛いイメージを持っていたが，その考えを 180°変える合宿であった．一人よりも二人，二人よりも三人と増えることで多くの考えが生まれ，より深く考察することができる．その時間が合宿ともなれば，より一層凝縮した学びになる．こうした経験ができたのも合宿に参加したからであり，私自身を磨く美的体験になった．

箱根合宿で学んだことは多く，それらを整理するのは困難が予想される．だからこそ問い続けていきたいと思う．

浦谷 郁子（ikuko_u5ikuko_u5@yahoo.co.jp）

運営委員会からのお知らせ

釜崎 太（明治大学）

今年度の日本体育学会（於：立命館大学）に関する情報

「体育哲学専門領域企画」と「一般発表プログラム」の日程についてお知らせいたします.

8 月 28 日（水）

一般発表１

10:30～12:30　座長：河野清司（至学館大学）

神野周太郎（仙台大学大学院）体育学における経験概念の検討―デューイの経験概念を中心として―

林洋輔（筑波大学）体育学の全体像および独自性の解明―ルネ・デカルトにおける＜学問の樹＞を手がかりとして―

森田啓（千葉工業大学）大学体育におけるスポーツサイエンスの可能性―体育・スポーツ領域の解体と新しい大学体育の構築―

跡見順子（東京農工大学）体力再考―重力健康科学からの体育原理・身心関係・健康基盤の再構築（その四）―

12:30～13:30　運営委員会

13:40～14:40　キーノートレクチャー

司　会：関根正美（日本体育大学）

演　者：井上誠治（国士舘大学）

テーマ：ヒューマニスティック体育論の系譜

14:50～15:50　浅田学術奨励賞・受賞記念講演

司　会：久保正秋（東海大学）

演　者：林洋輔（筑波大学研究員／国士舘大学特別研究員）

テーマ：デカルト哲学を捉え直す―＜心身合一＞からの展望―

8 月 29 日（木）

一般発表２

09:00～11:00　座長：釜崎太（明治大学）

後藤太郎（東海大学体育学研究科）競技スポーツの指導哲学に関する一考察―現場の「ずれ」に着目して―

関根正美（日本体育大学）劇薬としての民主的トレーニングの効能―自己の変容と他者関係―

岡部祐介（山口福祉文化大学）スポーツにおける「根性」言説の成立と変容―大松博文と「東洋の魔女」の再解釈を通して―

根本想（早稲田大学大学院）近代スポーツにおけるアマチュアリズム再考

11:10～12:00　総会

一般発表３

13:00～14:00　座長：大津克哉　（東海大学）

荒牧亜衣（筑波大学大学院）オリンピック・レガシーに関する研究―無形のレガシーに着目して―

舛本直文（首都大学東京）無形のオリンピック・レガシーとしてのオリンピックの精神文化

8 月 30 日（金）

一般発表４

9:00～10:00　座長：大橋奈希左（上越教育大学）

三輪亜希子（名古屋女子短期大学部）海外活動キャリアをもつ日本人ダンサーの「言葉」を探る―「素直な身体」という捉え方に焦点をあてて―

米澤麻佑子（東京藝術大学）対話のできるからだの育成―ダンスの振付け作業が導く＜身心＞の解放と他者受容―

10:00～12:00　シンポジウム：スポーツ実践の思想（一年目）：スポーツ実践の現在

司　会：田井健太郎（長崎国際大学）・佐々木究（山形大学）

演　者：谷知典（神戸市立葺合高等学校）学校現場におけるスポーツ実践
―実践者である教師の語りとして―

遠藤俊典（青山学院大学）「速く走る」トレーニングの実践

上田丈晴（横浜マリノス株式会社）プロスポーツ実践の思想
―「Ｊリーグの思想」は存在するか―

一般発表５

13:00～15:30　座長：森田啓之（兵庫教育大学）

深澤浩洋（筑波大学）スポーツにおける拡大体験へのアプローチ―西田の身体観を手がかりに―

石垣健二（新潟大学）「身体的経験」の領域―身体的対話と間身体性についての考察―

高橋浩二（大阪産業大学）身体教育における「ナヴィゲーション」の必要性―オートポイエーシス型実践の展開に向けて―

岡田悠佑（早稲田大学大学院スポーツ科学研究科）中村敏雄の学校体育論における思想変容
―「水泳」研究に着目して―

松田太希（岡山大学大学院）近代教育と体罰に関する考察―森有礼の兵式体操論への着目―

○体育哲学専門領域の HP について

HP についてお知らせいたします．現在，下記の URL にて HP を公開しております．これに関するご意見もお寄せ下さい．

http://163.43.177.95/genri/framepage5.html

○「専門領域メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております．速報性，経済性，「体育哲学専門領域」活性化の観点から，是非ともご登録をお願い申し上げる次第です．次のような手順で登録できます．

1）グループへ参加するには，事務局 kamasaki@meiji.ac.jp までご一報ください．

2）登録完了後，taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます．

なお，異動等の関係でメールアドレスに変更があった場合は，速やかに事務局までお知らせ下さい．宜しくお願いいたします．

（釜崎 太 kamasaki@meiji.ac.jp）

広報からのお知らせ

○お詫びと訂正

前号（17-1）において編集上のミスが生じ，誤記載がございました．関係する皆様に伏してお詫び申し上げ，訂正いたします．

１．書籍紹介

書籍発行年　（誤）アマルティア・セン：池本幸生訳(2012)『正義のアイデア』

（正）アマルティア・セン：池本幸生訳(2011)『正義のアイデア』

本文８行目　（誤）（ケイパビリティは，…．(私は，…捉えています．）

（正）（ケイパビリティは，…．私は，…捉えています．）

２．会報発行年　（誤）平成 24 年　→　（正）平成 25 年

○前会長および前運営委員長のご挨拶

本専門領域 HP（http://163.43.177.95/genri/framepage5.html）内の「役員および組織」に，大橋道雄前会長（東京学芸大学）および服部豊示前運営委員長（明治薬科大学）からのご挨拶が掲載されております．

訃報

本専門領域会員の髙橋健夫先生（日本体育大学）が 7 月 16 日，享年 70 歳にて，ご逝去されました．会員の皆様も，教育研究，学会活動，マス・メディア等により，スポーツ教育学を中心とする髙橋先生のご貢献については，十分ご存知のことと思います．心からご冥福をお祈り申し上げます．

次号予告！

次号は学会情報・研究情報などの内容でお届けする予定です．投稿を下さいます方は，高橋浩二（takahashi@spo.osaka-sandai.ac.jp）までお問い合わせ下さい．

体育哲学専門領域会報第 17 巻第 2 号

発行者　日本体育学会体育哲学専門領域

久保正秋（会長）

編集者　小林日出至郎（広報委員長）

発行日　平成 25 年 7 月 26 日

連絡先 950-2181 新潟県新潟市五十嵐 2 の町 8050

新潟大学教育学部

025-262-7075（直通）

アドレス：hinode@ed.niigata-u.ac.jp

【編集後記】夏の季節です．本領域の箱根研究合宿が終了しました．新たな参加者のご報告にこの研究会が継続している意義や価値が表現されております．8 月 28 日から 30 日までは立命館大学にて日本体育学会が開催されます．本領域では一般研究発表 17 題，キーノートレクチャー1 題，浅田学術奨励賞受賞記念講演 1 題，シンポジウム等が予定されております．体育・スポーツに関する熱心で活発な研究活動が予想されます．これらの活動は身体的観点による教育界への貢献，持続可能な国際社会への教育貢献に繋がることと思われます．会員皆様の暑さに負けないご健勝を心から祈っております．（K）